

「王の剣士」 番外一

『バインド』

雅

第一稿 2006.7.27
最終稿 2007.9.8

切り裂き、剣を合わせる事に至上の喜びを見いだすバインドにとって、その事は自分の存在すら無意味に感じさせた。

紙を切り裂いているように感じる。

人形の手足を落としているようだ。

周囲は口々にバインドを称賛した。比類無き剣士、誇るべき剣士だと。

バインドはその称賛を冷めた眼で眺めていた。人形を斬って誉められるとはお笑いだ。

苛立ちは日毎夜毎にバインドの中に降り積もり、静かに、気付かれぬままに確実に、狂気を育てていった。

それはやがて、最悪な形を取って現われる。

ちょうど十四年前の冬、北方の辺境で反乱が起きた。反乱を起こしたのは、ある剣士の一族だった。

王は北方辺境軍約千名を投げ鎮圧に当たらせしたが、彼等は雪解けの季節に至っても尚、反乱を鎮圧できずにいた。

それも当然の事だろう。剣士一人いれば、百の兵を抑えると言われる。

王都からただ戦況を眺めながら、バインドは内心、焦りすら覚えていた。

剣士。剣士だ。自分と同じ存在。

最強の剣士と謳われながら、バインドは剣士と剣を交えた事などない。

それもまたお笑い草だと思つたが、剣士の数は少なく、その機会は得られなかった。

彼等の事は聞いていた。仕える先を定めず、求めに応じて戦場に出る一族だ。

バインドの焦りを余所に、近衛師団が動かされる気配は無かった。総将へ進言したものの甲斐はなく、王への謁見は受け入れられなかった。

戦いが長引くほどにバインドは焦れた。

だが同時にそれは、バインドにとって、吉報でもあった。

彼らが剣を交えるに値する相手だと、取りも直さず証明しているのではないか？

やがて辺境の雪も溶け出す頃、ついに近衛師団第二大隊に王の命が下

された時、バインドは眩暈のするほどの喜びを覚えた。

相手の力量はどれ程だ？

何合剣を合わせてくれる？

全員と戦つてもいい。

早く戦いたい。

早く。

早く――。

辺境に辿り着いたその日に、バインドは戦場に出た。戦況は聞いてい

た以上に悪く、兵達の疲弊は激しかった。

それが、僅か数名の剣士達による為だと――。

バインドは笑った。

早く。

剣士の一族は、たった一人が戦場にいるのみだった。

男の足元で呻きを上げる兵達は、だが誰一人死者はいない。

男は、バインドが来るのを待ち構えていたかのように笑った。

青白く光る剣がバインドの剣と呼応する。

何か男と言葉を交しただろうか。既に忘れた。

だが、その後の事は明瞭に覚えていた。

バインドの初太刀は、男の剣に軽々と弾かれた。

驚愕と――身体の奥底から沸き上がる悦び。

それはバインドの中にあつた本能を明確に浮き上がらせた。

ぎりぎりの生と死を垣間見る事、その戦いこそ、剣士の存在意義だ。

それ以外に意味はない。

戦いは唐突に、バインドの予想もしない形で終わった。

男と剣を合わせる内に、今までになかった力が呼び起こされていく。それでもまだ足りない。男を倒すには、まだ。

死はずぐそこにあり、生は遠退く。それすら心地よい。

だが

男は、ほんの一瞬、バインドとの戦いから視線を逸らせたのだ。

戦場から遠く離れた、森の方角へ。そしてその剣の力を向けた。

ただ一瞬の内に、生と死は逆転し、バインドは呆然と足元に倒れた男の身体を眺めていた。

何が起こったのか、理解できない。

何があの男の気を、自分から逸らした？

勝利の喜びなどない。虚ろな心の中に沸き起こったのは、——怒りだ。

視線を、逸らす？

逸らすだと？

——ふざけやがって。

身を渦巻いて捻りあげるような苛立ちと怒りが、バインドの身体を支配した。

自分との戦い以上の、何がある？

剣士にとって、目の前の戦いの他に、何の価値がある！？

勝利に駆け寄った副将を切り捨てた。驚き、そして憤り、それから恐怖の内に逃げ惑う自軍の兵士達を、目につく者から全て切り裂いた。

周囲が何百、何千という死体で埋まっても、苛立ちは収まらなかった。そうして、森に、あの男の視線が向いた方角に向った。

怒りが、込み上げる。

足で土を蹴り上げ、右肩を樹の幹に激しく叩きつける。身体が勢い良

く弾き返され、よろめき背後の幹に音を立てて凭れかかった。

「くそっ！ あの野郎……何だってんだ！」

俺に剣を合わせる価値が無いとでも？

この俺に、この剣士バインドが、

全てを向けるだけの価値が無いと、そう言うのか！？

ふいに、頭の中で嘲りの声が囁く。

「——剣士？ 笑わせるな。剣を失って、何が剣士だ」

（お前に価値は無い。価値があったのは私だ）

（私を失ったお前に価値は無い）

（くだらない生だ）

「うるせえ！ うるせえ！ うるせえッ！」

右腕を振り上げ、目の前の岩目掛けて叩きつけようとして、ありもし

ない腕は当然のごとく空を切る。バインドは体勢を崩して岩の上に倒れ

込んだ。身体が強かに岩に叩きつけられる。

一瞬呼吸を失った喉の奥から吐き出される息に、やがて低い笑いが忍

び入る。

「……くッ、クク、ハハハ……」

くだらない生？

いいじゃないか。

剣を失い、自分の生きている意味など無いと言うのなら、それもそう

だろう。

自分が望んだ生でもない。

だが敢えて死ぬ気もない。

「死にたい奴が死ぬ。俺は別に、どっちでも構わねえ」

確か、やりたい事があった。

「なんだっけかなあ」

起き上がり、額に手を当てて思考を巡らせる。

そうだ、あの男。あの剣士を殺すのだ。

今度こそ完璧に、あの剣を抑えて殺す。

（もういない。私が斬った）

「そうだ。俺が斬った。あれは楽しかった」

(殺せ)

「誰をだよ」

(私を斬り落とした剣士)

「焼け死んださ」

(殺せ)

「けっ」

よるめきながら立ち上がり、バインドは当ても無く歩き始めた。

樹々の間を抜け歩く内、不意に細い道に出る。

その道へ一步踏み込んだ途端、高い悲鳴が耳を打った。

悲鳴のした方へ顔を向けると、緑の瞳と視線がぶつかった。

恐怖に見開かれた瞳に視線を合わせたまま、バインドはその眼を細めた。

「何だ、てめえは」

威嚇する荒々しい声に、漸くその場にまだ他の者達がいる事に気付き、

バインドは緑の瞳から視線を動かした。

三人の男達が抜き身の剣を掲げて、一人の子供を足元に押さえつけて

いる。子供の手から転がり落ちたポロポロの袋から、僅かな食料が覗い

ていた。だが汚らしい袋に、どう見ても似つかわしくない品物だ。押さ

えつけられている子供が、どこから盗んできたのだろう。

今いる道を辿ると、北の街道沿いのちよっとした街がある。

バインドは男達の姿を眺めた。これまた、街の警備隊という訳でも無

さそうだ。

子供がどこからか盗んだ食料を、更に山賊達が奪い盗る、といったと

ころか。

「クク」

低く嗤い、背を向けて歩き出そうとしたバインドに、男達の一人が立

ち上がる。

「何笑ってやがる、てめえ」

だがバインドが止まる気配を見せない事に苛立ったのか、手にした剣

をこれ見よがしに振り翳し、男は荒々しい足音と共に近寄った。男の腕

が、バインドの右肩に掛かる。

バインドの足が止まった。

男はバインドの肩にかけた手を、ぎよっと振り払った。

「何だあ、こいつ、片腕がねえ」

「腕なんかどうでもいいじゃねえか。そいつは何か持ってねえのか、とつ

とと」

ふいに、バインドに手をかけた男の身体が跳ね飛び、残りの二人の足

元に叩きつけられた。

男達が驚愕の表情を浮かべ、転がった仲間を見つめる。それから、ま

だ子供を押さえつけたままの体勢から、バインドを呆然と見上げた。

「……て、てめえ、何やってんだ……」

バインドは無言で近寄ると、片足を振り上げ、転がった男の腹を蹴つ

た。男がぐもった呻き声を上げて転がるのを追って、頭を、背中を、

腕を蹴りつける。

肉が裂け、骨が砕ける。

「や、止めろっ！」

慌てて立ち上がった男の一人が、バインドの背中に振り上げた短剣を

突き立てた。

肉に深く突き刺さるはずの刃はバインドの身体に触れた瞬間、音を立

てて折れた。

「……っひ」

信じ難いものを目にして、男達が呆然と立ち竦む。

振り向きもせず、転がった男を再び蹴りつけ仰向けにすると、バイ

ンドは男の喉に足を掛けた。

ぐ、と体重を乗せると、悲鳴さえ上がらないまま、鈍く砕ける音が響

く。すぐには絶命せず、男は痙攣のように手足をばたつかせている。

その姿から面白くも無さそうな視線を外し、バインドは漸く背後の残

りの二人に向けた。自分の足元に落ちた砕けた刃に気付いて、薄く嗤う。

「——何だ。俺を斬るのに、この程度の短剣か？」

感情の欠落した寒々しい響きに気圧され、残りの二人が後退った。

「う、うわっ」

バインドは一步踏み出した。手を伸ばし、もう一人の持っていた剣の刃を握り込む。それはボキリと、枯れ木のように折れた。バインドの口元が冥い笑みに吊り上る。

「……おいおい、もつとましな剣を見せてくれよ」

「ひいつ、く、来るなっ」

男達は絡まる足で土を掻くように背を向けると、転げるようにして我先に森の中へ駆け込んだ。

バインドは彼等の後姿に首を巡らせたものの、すぐに興味を失ったように視線を戻し、足元に蹲ったまま震えている子供にその視線を落とす。それから、その傍に落ちていた袋に手を伸ばしてそれを拾い上げた。

ずしりと重い袋を逆さに振ると果物や干し肉が幾つかと、それから壘が一本、柔らかい土の上に転がり落ちる。

「おっと、葡萄酒なんて入ってんじやねえか。それなりの品だな」

拾い上げ、手の中で放りながら、怯えたままの子供に眼を向けた。おおよそ五、六歳程度か、薄汚れた顔と手足に、いつ洗ったのかも分からない汚い服を着ている。

「おいガキ。こんなもん持つてるからそんな目に合うんだ。どうせ盗むなら、今度から俺に持って来いよ」

ひとつ嗤うと立ち上がり、バインドは森の奥に足を向けた。

ふと、何かの気配を感じて目を開ける。いつの間にか寝ていたのだろう、既に陽は落ち、辺りは薄い闇に満ちていた。

すぐその茂みに息を殺している気配がある事に気付く、バインドは軽く眉を顰めた。全く上手く隠しきれてはいないが、殺意や攻撃心がある訳でもない。

「誰だ」

起き上がると、前方の茂みに声をかける。

「おい、出て来いよ」

暫くの沈黙の後、がさりと茂みが揺れて、小さな子供が姿を現した。

「ああ？」

意外な姿に軽い驚きを覚え、眼を眇めると、子供はびくりと身を縮ませた。

「――昼間のガキじゃねえか」

子供は暫らく怯えるようにバインドを見つめていたが、やがてそろそろと近寄ってきた。少し離れた場所で立ち止まる。

「何の用だ？」

そう聞いてから、バインドはふと可笑しくなって、薄い笑みを刷いた。
(こんなガキが、俺に何の用がある?)

だがバインドが笑ったせいだろう、子供はどこかホツとしたような色を浮かべ、もうほんの僅かだけ近寄った。それから、手にしていた袋を差し出す。昨日と同じ汚い袋だ。その膨らみから、そこに壘が入っているのが見て取れる。

バインドは黙ったまま、子供に視線を向けた。

バインドが一向に受け取ろうとしないのを見て、子供は見るからに慌てた。自分が持ってきたものは間違っていたらどうかと問うかのよう、袋とバインドを交互に見つめる。

その様を暫らく眺めていたバインドの喉の奥から、低い笑いが洩れた。

「クク……ハハハ！」

肩を震わせてひとしきり笑うと、バインドは子供に視線を戻した。

「昨日の事を覚えてたのかよ。そいつはありがてえな」

自分に救けられたと、そう思っているのか？

だとしたらお目出度いガキだ。

「クッククク……」

再び喉の奥で笑い、バインドは気紛れに子供に笑みを向けた。

「そこに置いていけよ」

子供の汚れた顔の上に、ぱつと喜びが広がる。

「――」

突かれたように黙り込んだバインドへ、壘を袋から出して押し付けるようにして渡すと、バインドが何を言う間もなく、あつと言う間に子供の姿は茂みの向うに消えた。

バインドは暫らく壘を手にしたまま、黙って子供の去った方向を眺めていたが、やがて舌打ちしてそれを放り出した。

視線の先で青白い光が膨れ上がる。

女が何かを叫んで、光を覆い隠そうと動く。

光は鋭い刃のようにバインドに向かって伸びた。

全ての動きが、まるで止まっているかのように映る。

光が肩に突き刺さり、肉が、血管が、骨が断ち切られていく。

脳髓を貫くような痛みが、バインドの意識をじわりと支配しはじめた。

凄まじい苦鳴が耳を聳して響く。

それが自分の中から響いているのに気付き、跳ね起きた。

森が震え、ぐるりと回る。

自分の視界が回っているのだと気付かないまま、バインドはその場に突っ伏して吐いた。

土と腐りかけた落ち葉と自分が吐き出した胃液に塗れながら、左手が

右肩を慌ただしくまさぐる。

「無え、無えッ！ くそつくそッ」

右肩が火が点いたように熱い。

「ちくしょうッ！」

頭を地面に幾度も叩きつけ、左手が闇雲に土を掻き散らす。

背後でガサリと茂みが鳴った。

視線を向けるより早く、バインドの腕が伸びる。

指が細い首を掴んで吊り上げた。

荒い息の向うで、子供が大きな瞳を怯えに見開き、バインドを見つめる。

バインドの中に生じた驚きが、すぐ強い苛立ちに変わった。

「――何だ、てめエ………何で俺に付き纏う」

ギリ、と音を立てて指が喉に食い込む。バインドは獰猛な獣のような

笑みを浮かべ、子供の顔を覗き込んだ。

怒りがじりと込み上げる。

「俺がお前を救けたと、そう思ってたのか？ この俺が、お前みてエナガキを救けたと？」

吊り上げられた手足が、泳ぐように宙を掻く。

「この先も救けて貰えるかもしれねえと、そう思ってたのか！？」

バインドは喉を引きつらせ、高い笑い声を上げた。

指に更に力が加わり、子供の顔色が青黒く染まる。

緑色の大きな瞳が、苦鳴すら上げず、黙ってバインドを見つめた。

不意に、怒りが失せた。

バインドの指から力が抜ける。

「ち」

子供はそのまま滑り落ち、落葉の中に転がって激しく咳き込んだ。

力の抜けた左腕をだらりと垂らしたまま、バインドは子供に背を向けた。

「失せろ。今度俺に近寄れば殺す」

森の奥へと一步踏み出した途端、全身の力が抜け、バインドはその場に倒れ込んだ。

四

右肩が熱い。

常に火が灯り続け、肉を焼き続けている。

右手の指の間接が、肘が、砕けそうに軋んでいる。

青白い光が辺りに満ちている。

あの男の剣が身を掠める。

目の前の剣士を切り裂くか、自分が切り裂かれるか。

押さえ難い笑いが込み上げてくるのが、自分でも判った。

ここで切り裂かれて死ぬのなら、それは悪くない死に方だ。

だが、期待していた死も、期待していた勝利も無かった。

ふいに男の剣が砕け、その姿が掻き消える。

狼狽すら覚えて一步踏み込んだ先に、もう一つの青白い光が見えた。

まだ生まれたばかりの、真新しい光。

だが、そこから発される力の片鱗に、バインドは笑った。

男の視線が向いたものは、あれだ。

ただそれだけを目指して、歩く。

こんなものの為に、あの男は戦いから気を逸らしたのか？

くだらない。

いや、早く育て。早く、早く。

そして――

俺と、闘え。

冥く嘲る声が囁く。

——いいや。

——お前に既に、剣は無い。

ひやりと冷たい感覚に、バインドは閉じていた眼を開けた。開けるよりも前に、そこに居る者が誰か判っていたが、感じる怒りは無かった。

バインドの視線に押されるように、子供が後退る。バインドは自分の右肩に置かれた、水を含ませた布に眼を落とした。焼け付く痛みを布が冷やしている。

「——ふん。お前は俺の言葉を理解していないのか？ それとも殺されたいって事か？」

身体を起こし、載せられていた布を子供へ放る。それは身じろぎもしないままの顔にびしやりと当たった。

冷淡な言葉にも、子供はただバインドの顔を見つめたままだ。よく見れば、最初五、六歳と思われたが、もう少し年齢は上だろうか。栄養の極端に不足した体付きのせいで幼く見えているのだろう。栄養の

未だ一言も言葉を発していないという事は、口が利けないのか、それとも言葉を知らないのか。

「……チッ」

バインドは舌打ちをすると、鬱陶しそうに左手を払った。

「行け」

そう言うのと再び、視線すら向けずに横になった。

子供は土の上に寝転がった男を見つめ、それから自分もその場に横たわった。

そうすると男の背中が見える。

出会ったときに笑ってくれた。

いくらいっしょけんめい考えてみても、自分に笑ってくれたあいてをほかに思い出すことができない。けれど男は、きのうも自分に笑ってくれた。

さつきは首をつかまれてひどく痛かったけれど、きつとまた、あのキレイなビンを持ってくれば笑ってくれる。

あのへやにはあれがいつばいあって、きつとあのぶんだけ自分に笑ってくれるだろう。

食べるものも、持ってきたらいいかな。

子供は小さく笑みを浮かべ、身体を丸めて眠りに落ちた。

子供は、いつから一人だったのか、それすら覚えていなかった。ずっとずっと、ずっと前に、誰かと一緒だった気がするけれど、その

人の顔も思い出す事は出来なかった。日々を生きるのに精一杯で、思出す余裕も無い。時折暖かい陽射しの中でまどろんでいると、微かに、臙げな輪郭が蘇って来るような気がした。子供にとって、彼等はそんな存在だった。

実際には、子供は物心つく前に両親を病で失っていた。ただでさえ貧しい村に生まれた子供には、引き取ってくれるような親戚も隣人も存在せず、それはただ死ぬのを待つ状態に置かれたようなものだった。

空腹のあまり村の畑の野菜を盗み、それで村を追い出された。

子供が飢えて死ななかつたのは、幸運の上にも幸運が重なったからと言っている。子供に限らず、例え成人であっても、厳しい季節、病、飢え、そんなもので命を落とす者は後を絶たないのだ。

弱い者から死んでいく。それが、当然の摂理だ。

子供は村を追い出された後、当ても無く彷徨う内に、大きな森に辿り

着いた。

森は村よりも、子供に優しくかった。

空腹を感じると、森の中に生えている草の根や、小さな生きものを捕まえて食べた。小川ではうまく行けば、魚が捕まえられる。

暖かくなってくると、森はともい場所になる。花は蜜を蓄え、木には甘い果実がたわわに実る。小さな闖入者一人分を養うだけの余裕を、森は十分に持ち合わせていた。

夜は大きな木の根元に丸まって眠る。凍えそうな時は、土に穴を掘った。

森を出る事はあまりない。

森のすぐ傍には北の街道が走り、小さいながらも栄えた街があった。

アス・ウイアンというその街は、王都から馬で四、五日の距離にあり、王都の恩恵を受けるにそれは十分な距離だ。

だが、子供にはそれは理解できるものではなく、第一子供は王都すら知らない。

ただ、街には大勢の住民がいて、子供にとっては恐ろしい場所というだけだ。

街の中は綺麗でいたる所で美味しそうな匂いがするけれど、子供が近づくと石をぶつけられたり追い掛けられたりするから、すごく怖い。森にも大きな生きものがいて、恐ろしい思いをする事もあったけれど、彼らの住んでいる場所に近づかなければ、彼らもあまり近寄ってはこなかった。だからいつも森の中にいた。

この間、おおぜいが住んでいるところが、すごく賑やかだった。きれいな音が聞こえて、たくさんいい匂いがしていた。

恐さを忘れて近寄ったら、見たこともないくらいたくさんの人達がい

て、見たこともないものがいっぱいあった。

それは街の祝祭だったが、子供にはただ奇異に、そして華やかに感じられただけだった。

街の中を歩いていても、誰も子供を気に留めず、誰にも追い掛けられ

ても大きく立派な家があって、壁に子供が漸く通り抜けられるほどの隙間があった。その中に何があるのか、ふと気になってそこから潜り込ん

だ。

部屋には誰の姿もなく、ただたくさんの木箱や麻袋が整然と置かれて

いるだけだ。子供は辺りを見回し、きれいな壇と、美味しそうな食物を

見つけて、それを持ってそこを抜け出した。

賑やかに浮かれる街を抜け、森に入ったところで、あの男達と出くわ

した。少し走ったけれど、捕まえられて、せつかく持ってきたものを取

られそうになった。

まさに自分が殺されるところだったのだと、それが子供に理解できて

いた訳ではない。

だが子供が絶望や不条理という言葉を知っていたなら、こう明確に考

えただろう。

何故、こうも苦しい想いばかりをしなければならぬのか？

その時、初めて彼に会ったのだ。

子供が持つてきた壇を見て、彼は子供に笑みを向けた。

あれがあると笑ってくれるのだと、以来夜にこっそりあの場所に行っ

ては、あの壇を持つてきた。

朝の光に眼を開け、バインドは辺りを見回した。あの子供の姿は見当

たらぬ。

汚れていた顔や手がすっかり拭われているのに気付き、バインドは顔

を蟹めた。

(ふざけやがって。何なんだあのガキは)

どうにも苛々して仕方がない。あんな子供一人が自分にどう影響する

訳でもないが、追い払ってもまるで逃げようもしないのも気に食わな

かった。

ふと眼を向けると、すぐ足元に昨日の壇が置かれている。

手に取り、放り捨てようと思ったものの、バインドは振り上げた腕を止めた。代わりに木の幹に壇の首を叩きつけて割ると、中の液体を喉の奥に流し込む。

酒の味は悪くは無かった。

五

歩くと背後で足音が鳴り、立ち止まれば止まる。

今日は既に一刻近くもその追いかけてっかが続いていた。

バインドは苛々と振り返った。

「煩えっ！ 一体何のつもりなんだてめエは。ちよろちよろちよろ、いい加減どつかへ行つちまえ！」

先程から何度同じ事を怒鳴ったか知れない。だが子供はバインドが振り向くと、恐がるどころか何故だか知らないが嬉しそうな顔をして、手にした食料を差し出すのだ。

痩せて汚れた手に、大事そうに握り締めたそれを、何度となくバインドに差し出す。

「……はあ……。いらねえって言うてんだろ」

いい加減怒鳴るのにすらうんざりして、溜息をつくバインドはその場に座り込んだ。

そうすると子供も近くにちよこんと座る。まだ距離はあるものの、その距離はずっと狭まっている。

何が気に入られたのか、バインドにはさっぱり検討が付かなかった。気紛れにもやさしくした覚えなどない。

無視して、その内飽きるのを待つしかない、バインドは土の上に横になった。

視界の片隅に、子供の姿を捉える。

薄汚れ、痩せこけた子供。

ふと、あの赤子が思い起こされる。

あの時の赤子はどうなっただろう？

自分があの子の一族を滅ぼした。

剣から迸り出た炎に巻かれ、燃え落ちていく里が脳裏に浮かぶ。

この子供と同じような道を辿っているか、殺されたか。

——殺された？

ふざけるな。俺の腕を奪ったガキだ。

赤子の身体から膨れ上がった、青白い光。

右肩が鋭い痛みを訴え、バインドは肩を掴んだ。口元が笑みに歪む。

もう一度剣を交え、俺が殺す相手だ。

右腕が嗤った。

剣を交える？ 剣などないだろう。

「――煩え」

（あの赤子は、成長すれば誰よりも強くなるだろう。あの男すら超えて）
（だがお前にはもはや剣など無い。お前の事など歯牙にもかけないだろ
うよ）

（煩え）

……せ。

殺せ。

殺せ。

あの時味わった快楽を、再び味わえ。

切り裂き、焼き尽くせ。

声が耳を聳さんばかりに響く。

――剣を。

「煩エッ！」

怒鳴って身体を振り起こす。

「ねエんだよ！ 剣なんざあ！」

バインドの言葉に押されたように、声は唐突に静まり返った。

しばらくの沈黙の後、耳元で嘲るように囁いた。

（何故、生きている）

「――煩え」

じり、と肉が焼けつく熱を纏い、無いはずの右腕の骨が軋む。

舌打ちをして、バインドは再び寝転がった。

血が止まり、肉が閉じ、傷が癒えても――収まらない痛みが、事ある
毎にバインドの思考を掻き回す。

――何故、生きている？

言われるまでもない、今の自分に存在価値などない。

切り裂く為にのみ存在する剣士が、剣を失って何の為に生きる。

戦えない事は、死と同義だ。

では自分は今、死んでいるのと同じだ。

「クク。正にその通り、存在すらしちやいねエ」

左腕に頭を載せてごろりと転がり、バインドは眼を閉じた。

声が再び囁き始める。

「ついでに、眠りも無いときてやがる」

軽く舌打ちをして、バインドはその声に耳を傾けた。

目を覚ますと、陽は既に中天に昇っていた。

昨日ここで眠りについたのは昼日中だった筈だ。すると丸一日近く寝
ていたという事か。ただ、剣を失ってからは、長ければ数か月間眠り続
ける事もあった。それはさほど驚く事でも無い。

困るのは、そうして起きた時は、時に身体の自由さえ利き難いほど空
腹な事だが――。

足元に目をやると、案の定食料が置いてある。

しかし見ればどうやら二日分だ。という事は、一日ではなく、二日間
寝ていたという事になる。

重い身体を引きずるようにして立ち上がる。

視線を巡らせた先に子供の姿は見えなかったが、待つほど無く、す
ぐに小さな足音が聞こえた。

兎のように茂みから飛び出し、そこに立っているバインドの姿を認め、

つんのめって立ち止まった。

不安げに見開かれていた瞳が、ぱっと安堵の色に染まる。バインドは

それを不可解な気分で眺めた。

（死んだとでも思ったか）

ぱらぱらと、その手に抱えられていたものが落ち、土の上に鮮やかな
色を散らした。

赤や黄色、橙——色とりどりの花だ。久しぶりに見る鮮やかな色に視線を据えたまま、それが何を意味するのかに思い至って、バインドは呆れた眩きを洩らした。

「……てめえ。俺を埋めるつもりだったのか」

ということとは、あと一日でも長く寝ていれば、気が付いた時は土の下だったという事にもなりかねない。

目の前の子供の顔を眺めている内、抑え難い笑いが込み上げ、バインドは喉の奥でくつくつと笑いだした。ひとしきり笑うと、子供に視線を向ける。

「とんでもねえガキだ。さんざ付き纏われて挙げ句に埋められるんじや、堪ったもんじゃねえ」

そう言うのと、まだ込み上げる笑いに顔を俯け、肩を揺らした。

ふと、足に軽いものがぶつかり、バインドは視線を向けた。

足にしがみついた子供に、一瞬言葉を失う。

「……………鬱陶しい。どけ」

子供を振り払い、バインドは後も見ずに歩きだした。

子供はバインドと食料を見比べ、慌ててそれを抱え上げると、後を追って走りだす。

小さな足音が追ってくるのを耳で聞きながら、バインドは肩を竦めた。

まあいい。今日は久々に気分がいい。

そういえば、久しぶりによく寝た気がしている。

夢も、見なかったか——？

漸く戦場で向き合えた相手に、堪えきれない喜びを感じながら、バインドは男を眺めた。

「何を考えて反乱なんか起こしたんだか。まあお陰で俺は貴様と戦える。感謝してるぜ」

男はバインドの瞳に浮かんだ戦いへの渴望を、面白そうに見やった。

「お前にはまだ判らないだろうなあ。お前は剣に喜んで吞まれる質だ」

その物言いが気に食わず、バインドは男を睨み付ける。

「それ以外に何がある」

「剣士は切り裂く為に生まれる。だがその剣は、守るものも選ぶ」

どこか歌うような口調に、バインドは自分の血が沸騰するのを感じた。

「くだらねえ」

男に向かって吐き捨てる。男はただ笑っただけだった。

「くだらねえ」

もう一度吐き捨て、バインドは地面を蹴った。

守るものを選ぶだと？ 選んだ結果どうなった。

あの男は俺よりも強かった。

だが、死んだ。

守るものを選んだ結果が、死だ。

剣士は戦う為だけの存在だ。

それ以外の理由は必要ない。

だが、男の浮かべた笑みが、バインドの脳裏から消えない。

きし。

腕が、骨を軋ませる。
右腕ではなく、

小さな悲鳴が上がり、バインドは樹の幹に背中を預けたまま、声のした方へ視線を向けた。

川の中で、子供が声を上げ、必死になって魚か何かを追い掛けている。動きを止め、じっと眼を懲らし、そして勢い良く手を水に突っ込んだ。その拍子に水の中に倒れ込み、盛大に水飛沫が跳ね飛ぶ。

水面から身体を起こした子供の手には、銀色に光る魚が握られていた。喜色を満面に浮かべ、バインドを振り返る。

「ち」

眉を顰め、バインドは視線を逸らした。子供はぺたぺたと足音を鳴らしてバインドの座っている場所に戻ると、魚をバインドの前に置いた。

うんざりと溜息をつき、バインドは子供を睨み付けた。

「いらねえって言うてんだらう」

子供は少し慌て、傍にあった壇を差し出す。

「……いらねえ」

バインドが何も取ろうとしない事に落胆の色を浮かべ、子供は手にしたそれらをじっと見下ろした。困り果てた様子が手に取るように判る。

バインドは苛立ちと諦めの交じった表情を浮かべ、やがて舌打ちした。

「……チッ。——おい、せめて焼け」

子供は何の事かと首を傾げる。

「……知らねえのか」

何をこんな子供にかかざらっているのか、バインドは溜息をついた。だがそれ以外にやる事がある訳でもない。鬱陶しいが、かと言ってわざわざ殺すのも面倒臭い。

子供の手から魚を取り上げると、ひよいと頭上に放り上げる。落ちてくるそれに向って、ふっと息を吹き掛けた。

炎が走り、魚に纏いつくように薄く包み込む。

炎はバインドの特性であり、術を使えずともこの程度は可能だ。

だが、赤く炎を纏った魚を見て、子供は慌てふためき、炎を纏いつかせたままの魚を掴んだ。

「おい」

バインドが身体を起こしかける間もなく、川にそれを放り投げる。

「……。——はあ」

水に浮かんだ魚を大事そうに拾い上げ、再びバインドに差し出す。今度は燃やすと言いたげな顔だ。

「——勘弁しろよ……」

呟いて、バインドは額を押さえた。

眠り込むバインドの姿を、そっと覗き込む。

彼は寝てばかりいる。きつと疲れているのだと思った。

食物をあまり食べない。だから疲れているのだろう。

街に行つて何かを持ってこようか。森のものはあまり食べないのかもしれない。

傍らの、手を付けられていないままの壇に気付いて、頷く。

もっと別のを持ってこよう。前に彼が飲んだものと同じやつを。

子供はもう一度バインドを覗き込み、深く眠っているのを——離れている間にどこかに行つてしまわない事を確認してから、立ち上がった。

壁の割れ目から部屋の中に滑り込む。

立ち上がり、子供は薄暗い部屋の中を見回し、それからにつこりと笑った。

積み上げられた木箱によじ登り、一番上の箱から壘を一本引き抜く。

壘の中の濃い赤が揺れるのを、満足そうに眺めた。

この色の方が、彼は好きだ。

壘を抱え込み、木箱のでっぱりを伝って下りる。

壘を割らずに降りた事にほっと息をつき、それから壁の割れ目に近寄ると、まず壘を入れた袋を押し出してから、子供はするとそれを潜った。

起き上がろうとした目の前で、壘の入った袋が持ち上がる。

慌てて見上げた先に、自分を見下ろす影があった。

咄嗟に袋を掴もうと伸ばした手から、袋がひよいと遠退く。

突然、腹部に焼け付く痛みが走った。悲鳴を上げて草の上を転がった身体が、今出てきた壁にぶつかって止まる。

「漸く捕まえたぜ、このくそガキ！」

衛兵は大腿に近寄り、子供の襟元を掴んでぶら下げた。壘を足元に落とし、子供をぶら下げたまま殴り付ける。

「領主の葡萄酒を盗みやがって、ふざけたガキだ。これまでのも全部めえだな！」

殴り付けてくる手と、怒りに満ちた眼に、恐怖が身体を包んだ。

自分を掴んでいる手にながむしゃらに噛み付くと、衛兵がわっと叫んで子供を振り払う。

勢い良く地面に落ち、もう一度小さな悲鳴を上げる。その顔の先に、衛兵が放り出した壘があった。

咄嗟にそれを抱え上げ、子供は出口に向って駆け出した。

怒りの声を上げて追いつがる手をすりぬけ、必死に走る。

倉から街を囲む城壁までは、ほんの僅かな距離だ。

通りに立ち並ぶ雑然とした屋台の間を走り抜け、街の門を目指して駆けた。

通りにいる者達は、逃げていく子供を冷めた眼で眺めている。

単なる盗つ人の子供だ。どうという事もない。捕まればおそらく命はないだろうが、自業自得というものだ。

子供は壘を大事そうに身体の前に抱えながら、ただ街の出口だけを指した。街を出ればすぐに森がある。

街の門を抜ける。

そこから伸びた街道の、少し先の左手に、子供の暮らす森が広がっている。

もう少し。

森に入れば、木々の間に隠れて逃げられる。

周りに誰もいなくなったら、彼のところに持っていこう。

今度はきつと受け取ってくれる。

これは彼の好きな赤い色の方だから。

そうしたら、笑ってくれるだろう。

子供の顔に笑みが広がる。

追い続けた衛兵の腕が、子供の肩を掴み、引き倒した。

手から滑り落ちた壘が、街道の石畳に落ちて砕け、紅い液体が零れた。

腕が痛む。

バインドは閉じていた目を開き、痛む腕に視線を落とした。

右ではなく、左。

骨が、微かに軋んでいる。

「……勘弁しろよ。左までいかれたら洒落にならねえ」

抗議の言葉を聞き入れたのか、痛みはすぐに治まった。

肩を竦めて立ち上がる。視界を巡らせたが、子供の姿は見当たらなかった。

先程一度起きた時にも姿は無かった。目を覚ませばそこにいるのが、ここところずっと続いてきた。何を言う訳でもなく、ただバインドが視線を向けると嬉しそうに笑う。

ただそれだけの事に、いつの間にか慣れてしまっている自分に気付き、バインドは呆れたように嗤った。

ふらりと歩き出す。

特に意識した訳ではなかったが、気の赴くまま、バインドは森の外に向かつて足を進めた。

薄暗い森から出ると、明るい陽射しが身体を包む。

久しぶりに受ける遮るもののないその光に、バインドは眼を細めた。

この森に入ってから、既に十日余りが経過している。これまでなんと言ふ事も無く、ただ赴くままに居場所を変えて彷徨ってきたが、この森は悪くはない。暫くはここに留まっても良かった。

石畳の敷き詰められた街道のすぐそこに、アス・ウィアンの街が見える。街道は街の横を抜けて、更に南へ、王都へと続いているはずだ。

今更そこに興味も無いが。

ふと、街の門の前が騒がしい事に気付き、バインドは視線を向けた。

その眼が、ゆっくりと細められる。

門の前に人だかりができてるのが見て取れた。

石畳の上に降り、バインドは門に向かって歩き出した。

嗅ぎ慣れた匂いが風に交じる。

幾度と無く、数え切れないほど自分の手で流した、血の匂いだ。

門の前まで歩み寄り、人だかりを押しつけてその中心に出ると、バインドは足を止め、それを見下ろした。

石畳の隙間に、流れたばかりの血が染み込んでいく。

割れた壇から零れた紅い液体に混じり、僅かに陽光を弾いていた。

「はあー」

溜息にも似たそれは、どこか感心しているようにすら響いた。

ざわめく人だかりに構わず、バインドは爪先で子供の身体を転がし、

仰向けた。

見開かれた緑の瞳には、既に生命の欠片すらない。痩せた身体のあちこちに、ひどく殴られた痕が見える。骨もいくつか折れているのだろう。

だが致命傷は背中の中の大太刀傷だ。血がここに大量に散っている。ここま

で逃げてきて斬られたか、運ばれて斬られたか。

どちらにしろ、自分いた森までは、そう距離はない。

「——俺の名でも、呼んだか？」

足元の身体を見下ろし、それが出来るはずのない事に気付いて、小さく

嗤った。

「クク……名なんぞ知らねえか」

バインドも、子供の名前など知らない。

耳元で煩く喚く声に気付き、バインドは漸く視線を上げた。

そういうえば先程から、数人が何かを喚いている。外見からすると、この街の衛兵だ。

「おい、貴様、このガキの仲間か？」

衛兵達はふらりと現れた男の姿を、どこか薄気味悪そうに眺めた。その右腕が無い事に気付き、眉を顰める。

バインドは黙ったまま、彼らに視線を向けた。

武装した衛兵達が、何かに圧されるように、数歩後退る。だが目の前にいるのは、粗末な服を纏っただけの、武器すら持たないただの男だ。

衛兵達は羞恥を押し隠すように殊更に声を上げ、改めてバインドを取り囲んだ。

「仲間かと聞いている！」

「名を名乗れ！」

鬱陶しそうに彼らを眺め渡し、バインドは再び視線を落とした。

ふと、口元に笑みを浮かべる。

「俺の名か。——そうだな」

教えておいてやってもいい。

最早意味も無い話だが。

「——バインド。フレイ・バインドだ」

焰が一筋走り、子供の身体を包み込む。

呑まれたように立ち尽くしている人々を尻目に、バインドは踵を返した。

森は穏やかな陽の光の中に沈んでいた。

鳥の囀りや、小動物の枝葉を駆け抜ける音、吹き抜ける風に枝を揺らす木々の騒めきが、森の息吹を伝える。

密やかな、濃密な生命の気配。

森を縫うように続く細い道を、バインドはゆっくりと歩いた。

右腕が痛む。じりじりと焦げる。

骨が軋み、肉が捻れる。

その痛みを浸すように意識を傾ける。

何を囁いている？

既に無い亡霊が。

何の意味も在りはしない。あの鳥達よりも無力な囀りだ。

だが、剣が無ければ、自分の生など更に意味はない。

バインドは薄い笑みを刷いた。

ふいに、その身体が弾かれたようによろめいた。

傍らの木の幹に背中を預け、バインドは何が起ったか理解しないまま、

自分の腕を眺めた。

左腕を。

そこから振動が膨れ上がり、その衝撃に再びバインドは弾き飛ばされ

た。

積もった落ち葉の中に転がる。

「っ」

眼が、見開かれる。

みしり。

左腕の骨が鳴った。

「ぐ……あ」

みしり。

苦鳴を上げる為に開かれた口は喉の奥を鳴らすばかりで、呼吸さえ吐

き出さない。

身体の下に押さえ込んだ左腕が跳ねる。
みし。

骨が、砕けた。

肉に突き刺さり、皮膚を破る。

慌てて左腕に眼を遣る。

違う。砕けてはいない。

苦痛の余りの錯覚だ。

だが、骨を揺すり、溶かし、形造ろうとしているもの、が。

肉を、神経を焼いていく。

倒れ込んだ身体と土の間から焔が洩れ出す。

土を舐めていた焔が腕を、背中を、脚を包む。バインドの身体が下生

えと土の上を転げ回る。

押し殺されていた苦鳴が、堰を切ったように溢れ、森の中に響いた。

砕け捨れ溶け引き裂かれ、——形成される。

溢れ出した焔が、周囲の木々を焼き始め、辺りが瞬く間に紅く燃え上

がった。

苦鳴が、ふいに止んだ。

暫くの間、火のはぜる音と、バインドの荒い息遣いだけが辺りに満ち

ていた。

やがて、俯せた喉の奥から擦れた笑い声が沸き上がった。

それは次第に大きくなり、炎を押し、狂気を孕んだ哄笑に変わる。

ふらりと身を起こし、バインドは炎の海の中に立ち上がった。

細められた眼が、左腕に落とされる。

「ク……クク」

左腕から、焔が滴り落ちた。

それは肉から盛り上がった骨を伝い、研ぎ澄まされた刃を伝い、足元

の地面に散る。

かつてバインドの右腕にあった、炎を纏う長剣——。

左腕から生えるそれを、バインドは一息に振るった。

衝撃が走り、木々を薙ぎ倒し、燃え盛る炎を掻き消した。

眼を閉じ、剣の感覚を確かめる。

全てが明瞭に、手に取るように感じられる。

小さな生き物達が蠢く様、獣の押し殺した足音と息遣い。川面を渡る

風の騒めき。

全てが、明瞭だ。

たった一つを除いて。

それを聞き分けようとするかのように、バインドは眼を閉じたまま自

分の感覚を探った。

何を探しているのか、自分すら理解していないままに、もはや聞こえ

るはずもないそれを追う。

樹の陰、川べり、森の小道。

剣が静かに明滅を繰り返す。

自分呼び起こしたそれを追う。

一度だけ、剣は大きく炎を巻き上げ、そしてバインドの中に消えた。

——剣は守るものも選ぶ。

だがバインドがそれを理解する事はないだろう。

そして、理解するには既に遅い。

バインドは閉じていた眼を開けた。

既にその先に見ているのは、ただ一つの戦いのみだ。

未だ姿も見ず、名も知らず、生きていかどうかすら定かではないその相手が、何の疑いようもなく、いずれ自分の前に現れると、バインドはそう確信していた。

あの青い光。そこに見た力の片鱗——炎などでは死ぬまい。

自分の剣でしか、死ぬのは認めない。

あの剣士と剣を合わせ、切り裂いた時、それが自分にとって、最大の存在意義になるだろう。

冥い瞳に狂気にも似た光を宿し、バインドは笑った。